

歴博 くらしの植物苑だより

第128回くらしの植物苑観察会 11月28日(土)

菊の栽培書

平野 恵(明治大学兼任講師)

菊は、ふるくから栽培され、人々に愛されてきた日本を代表する植物です。錦絵などの絵画や文学作品への登場回数は常に上位に位置します。本日のテーマ「栽培書」に登場する回数もおそらく最多を誇るのではないのでしょうか。本観察会では、江戸時代中・後期に執筆された栽培書から、主に菊の仕立て方を見ていきます。

1. 17・18世紀の刊本

17世紀から18世紀には、様々な植物の栽培法を記載した園芸全般に及ぶ書物が記されました。ここでは元禄年間、17世紀末に記された2つの書物を紹介します。

(1) 元禄8年(1695)『花壇地錦抄』

(2) 元禄11年(1698)『花譜』

菊の記述は、9丁(現代でいえば18頁)の長きにわたって、紹介されています。培養土、苗分け、鉢への植え替え、わき芽切り、篠竹結付、防虫、花壇の耕し方、肥やしの与え方、花壇設置場所、日照、水やりなどを、中国の書物からの引用と、日本の慣習の両方から記しています。ただし、記述方法としては、益軒の意見を述べるというよりは、様々な意見を紹介して是非の判断は読者にまかせるという傾向が強いようです。

このように菊について多くの紙面が割かれることは、覚えるべき栽培技術が多いのを意味します。技術が豊富なのはそれまでの蓄積によるものであり、いかに菊が古くから栽培されてきたかをも物語っています。

2. 19世紀の刊本

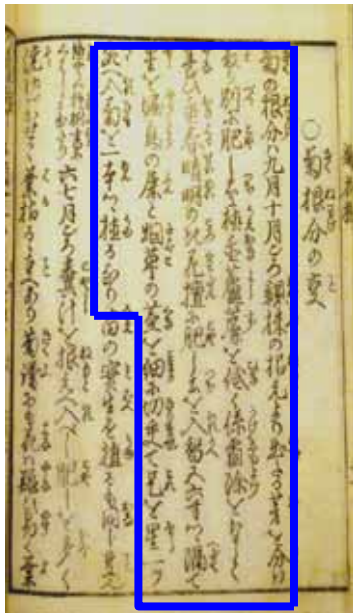
江戸時代の後半になると、朝顔や花菖蒲など一つの花の栽培書の執筆が多くなります。弘化3年(1846)刊、菅井菊叟の『菊花壇養種』^{きくかだんやしないくま}は、菊専門の栽培書として信頼のおける書物ですが、実は、他人の著作物の盗作も含まれていました。

盗作されたのは、文化15年(1818)刊、岩崎灌園の『草木育種』^{そうもくそだてくま}です。培養土、雨覆い、肥やし、根分け、花壇植え、殺虫、帚造りと扇造り、挿し芽が記されます。一例を挙げると、根分けの項では、草木育種・・・根分は九十月比、根もとより出たる芽を分とりて別に植て、^{よしず}蘆簾を低かけ霜を除置、春にいたり

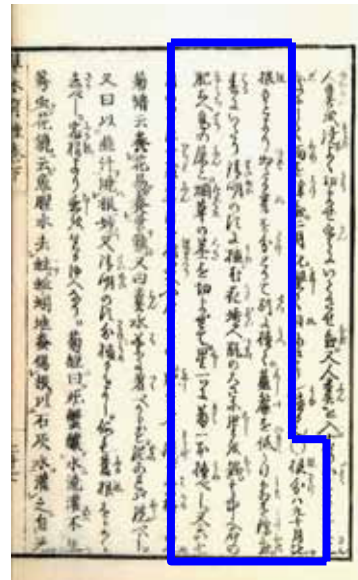
晴明の比に植ゆ。花壇へ^{つるべ}瓶の大きに星を堀、其中へ右の肥土へ鳥の屎と、^{ふん}烟草の茎を切まぜて是、星一つに菊一本植べし。

菊花壇養種・・菊の根分は九月十月ごろ親株の根元より出たる芽を分け取り、別に肥し土に植置、蘆簾を低く係霜除をなして養ひ置、春晴明の比、花壇に肥し土を入替五六寸つゝ隔て星を掘、鳥の屎と烟草の茎を細に切交て是を星一つ宛へ入菊を一本つゝ植るなり。

といった具合に巧妙に盗作されています。『菊花壇養種』は、『菊経』『花壇地錦抄』など古典の引用には書名を挙げているのに対し、同時代の『草木育種』の書名は挙げていません。多くの出版物があふれた時代ならではの、たいへん興味深い事例です。



『菊花壇養種』(個人蔵)



『草木育種』(個人蔵)

3. 19世紀の写本

19世紀になると、同じ菊の栽培法でも記述が多岐にわたり、執筆者は、様々な作り方が世の中にあることを承知の上で自説、あるいは他人の説を披露します。

「菊の作り方は迄其家々に而種々の手入方多し。しかはあれ、我作る所古しへより用ける所なれば是を本とすへし」(東京国立博物館蔵『本草書残欠』)

刊本とは異なり、写本では、極めて個人的なレベルでの栽培方法が記されます。こうした栽培書の系統を仮に分類して、いくつかをご紹介します。

(1) 菊名鑑(花壇帳)

『菊花植付記』(文京ふるさと歴史館蔵)

(2) 菊作り秘伝

『菊作方仕法』(国立国会図書館蔵)

『菊作り方其外秘伝』(国立国会図書館蔵)

『大菊育草』(名古屋市東山植物園蔵)

(3) 江戸菊の作りかた

「巢鴨齋田弥三郎 植松与右衛門(沼津帯笑園)書簡」

参考文献：『沼津市史 史料篇 近世2』沼津市、2000

平野恵著『十九世紀日本の園芸文化』(思文閣)2006

次回予告

第129回くらしの植物苑観察会 2009年12月5日(土)

「サザンカの楽しみ方」 箱田 直紀(恵泉女学園大学名誉教授)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要 要入苑料